

山梨県・富士吉田市。その名の通り、富士山の麓に広がる人口4万8千人の地方中小都市だ。毎年、何千人という登山客が出入りする。

東京からは車で2時間以内、バスでも3時間もかからずアクセスできるこの地域は、富士急ハイランドを訪れる家族連れや若者にも人気だ。

一方で、高齢化や人口減少、空き家の増加という多くの地方都市が抱える問題を抱えている地域でもある。そんな富士吉田の、あの場所が、この場所が〇〇だったら、この街の風景はどう変わるだろう？

「Saruya Posterzine #02」では、富士吉田の今とこれからを妄想してみたい。

Good News for Cities 石川由佳子 / 杉田真理子

上吉田と下吉田、その折り合わせが生み出す可能性

中島直人

自信が感じられる小さな地方都市

富士吉田は東京都心から3時間弱程度の距離にある、人口4万8千人の地方小都市である。この30年、人口減少が続いている。市の総合計画では、主要課題として「人口減少・少子高齢化の下での都市活力の維持」が第一に掲げられている。しかし、実際に富士吉田を訪れ、このまちで暮らしている人びとに接すると、人口動態から想像しがちな衰退や縮退といったネガティブな雰囲気は感じられない。むしろ、その暮らし、ライフスタイルに対する自信、堂々とした日常が見出される。地方中小都市の課題を考えようとするとき、数値だけを見て何かを判断すると、しばしば大事なことを見逃すことになる。すでにまちで暮らす人びとの日常の中からまちの再生の動きが芽生えており、そしてその日常に感化された人びとによる小さな逆流が起きているところは少なくない。富士吉田もそのようなまちの一つである。

富士吉田で目にする地図の多くは、南を上、北を下にして描いている。私たちがよく使う地図とは逆である。というのも、市域の南側に広大な富士山があり、その富士山に向かって上っていくというのが富士吉田の基本的な方向感覚だからである。実際、まち全体が富士山の裾野に位置しているので、ずっと富士山の方向に向かって緩やかに上っていく傾斜が続いている。それにしても、驚くのは富士山の大きさである。富士吉田のまちで眺める富士山は、頂部のみならず、山腹から山麓までの広がりが見野に収まる。そして距離が近い。夜間に眺めると、頂上を目指す登山者一人一人の灯りが肉眼でも確認できるほどである。

さらに驚くのは、地元の人びとは、富士山の眺望に特段の価値を抱いていないそぶりを見せることである。富士吉田には広いベランダを持つ住宅が多い。「あのベランダはやはり富士山を眺めるためなんですか」と尋ねても、「いや、たくさんの洗濯物を干したいだけよ」とそっけない返事が返ってくる。どこからでも富士山が見えるということの裏返しでもあるが、富士山は地元の人びとの無意識の中心にある。富士吉田のまちなかで、正午に流れる市愛唱歌のタイトルは「ここにはいつも富士がある」である。人びとの暮らしを抱擁する富士山という存在、そして富士山周辺の豊かな湧き水、麓の森林などの自然の恵みが、堂々とした日常を生み出している。

聖と俗 — 対となる上吉田と下吉田

富士吉田のまちは、合併前の町村域である4つの地域からなるが、人口的にも地理的にも中心となっているのは上吉田と下吉田である。この2つの地域は富士みちという、かつて富士講の人びとも歩いた一本の道筋沿いにある。

上吉田は富士講とともに発展したまちである。もともとは浅間神社の正面にあたる土地に立地していたが、今からおよそ450年前、雪代の被害を避けるかたちで現在地に移転し、町建てされた。上吉田は富士みちを中心に左右対称に展開された計画的な宗教集落である。今もその入口には富士みちをまたぐ金鳥居が建ち、沿道には全国各地からくる富士講の人たちを迎え入れ、祈祷、宿泊の世話をを行った御師たちの屋敷へのアプローチが整然と並んでいる。富士みちの終点には、豊かな社叢をもつ北口本宮富士浅間神社が鎮座している。宗教者たちのまちである上吉田はなかなか外から気軽に入っていくことができない、敷居が高い印象を受けるが、最近、御師の家を継ぐ若者がゲストハウスを開設したり、高校生たちの拠点施設が整備されたり、まちの内側からのまちづくりが芽吹き始めている。

一方、富士みちを少し下ったところにある下吉田のまちは中心商業地区である。富士吉田が織物産業で栄えた時代には大いににぎわった。ただし2007年に策定された「下吉田まちづくり構想」で「レトロ」「昭和モダン」がキーワードとされたことから分かるように、空洞化が進み、その栄華の名残が見られるというのが正直なところであった。しかし、この10年の間に、富士吉田内外からやってきた若者たちが、自分たちでそれらの建物に手を入れて、居心地のよい飲食店やゲストハウスなどに変えていった。もともと盛り場として様々な人を迎え入れてきた、相対的に敷居の高くない下吉田は、富士吉田のボトムアップのまちづくりの中心地だ。

このように、上吉田と下吉田は、その性格が対照的なのである。上吉田が聖、下吉田が俗といっていだろう。この聖と俗の折り合わせは、富士吉田の暮らしの厚みとなっている。そして、その両方のまちから、これからの富士吉田を自らの手で生み出していこうとする新しい力が湧きあがりつつある。自然に抱かれた地方中小都市にこそ、まちづくりの確かな実践とこれからの可能性があるかと教えてくれる。

中島直人

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻・准教授。専門は都市計画。富士吉田ではこの10年近く、学生とともにまちづくりの調査、提案、実験を続けてきた。主な著書に『アーバンスト 魅力ある都市の創生者たち』（ちくま新書、2021年）、『都市計画の思想と場所 日本近現代都市計画史ノート』（東京大学出版会、2018年）など。